

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：82723

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K18518

研究課題名(和文)モンゴル時代の漢語イスラム医学書『回回薬方』の史的研究

研究課題名(英文)Historical research on the Huihui yaofang the Chinese translation of Medieval Islamic medical literature under the Mongols

研究代表者

尾崎 貴久子(Kikuko, OZAKI)

防衛大学校(総合教育学群、人文社会科学群、応用科学群、電気情報学群及びシステム工学群)・総合教育学群・教授

研究者番号：00545733

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 4,800,000円

研究成果の概要(和文):本研究のねらいは、漢語イスラム医学書『回回薬方』(以下、『回回』)の記述内容分析を通しての、モンゴル時代におけるイスラム医学の中国への東伝の実相の解明にあった。『回回』はイスラム医学翻訳書と注目されていたものの、イスラム医学書原典との連関の究明はほとんどなかった。『回回』は10世紀アラビア語医学書2書と11世紀ペルシャ語医学書類を引用元とし、漢語訳はそれらアラビア語・ペルシャ語記述部分の一語一句の精緻な逐語訳であること、を明らかにした。全記述の引用元の同定はなしえていないものの、『回回』は10世紀以降に西アジアで編纂されたイスラム医学書の情報を集積した漢語翻訳書であったことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、イスラム医学の東進に関する研究に新たな展開をもたらしたといえる。漢語イスラム医学書『回回薬方』の引用元として、10・11世紀のアラビア語・ペルシャ語の医学書3書を見いだした。記述内容の比較検証から、中国におけるイスラム医学者集団の存在とイスラム医学治療の実践の様相を捉えうる複数の手掛かりを提示した。またその漢語翻訳は原典の一字一句の逐語訳であることが明らかになり、アラビア語・ペルシャ語と漢語の対訳表の作成にも着手した。一つのモノグラフとして研究成果を編む方向性と枠組みを打ち立てることができた。

研究成果の概要(英文):The aim of this research topic is to clarify the background to and process of the transmission of Islamic medical knowledge to China during the Mongol (Yuan) Period, through a content analysis of Huihui Yaofang, an early Ming Period Chinese compendium of 10th and 11th century Islamic medical texts.

The major findings include 1) the sources used in compiling Huihui Yaofang were two 10th century Arabic texts and one 11th century Persian text; 2) the Chinese rendition comprises word-for-word direct translations from the Arabic and Persian; however, 3) far from any attempt at an exhaustive translation of the original sources, Huihui Yaofang is rather a huge collection of items "cut" from those West Asian Islamic medical texts, then "pasted" into a layout conforming to the specific aims and interests of the Chinese editors.

研究分野：東洋史

キーワード：回回薬方 医学典範 東西交流 ホラズムシャーの宝庫 明 イスラム医学 中国医学 元

## 1. 研究開始当初の背景

申請者はこれまで、中世アラビア語料理書、医学書、農業書、年代記、旅行記などの文献をもとに、イスラム世界の食生活・食養生の実相と時代的変容に関する研究を進めてきた。そして、イスラム世界の文化と知識がアジアへ流入したモンゴル時代に焦点を当て、漢籍史料におけるイスラム医学・食文化の伝播の記録を調査するなかで、『回回薬方』(以下、『回回』)を知るに至った。本資料は、モンゴル時代のイスラム医学の東伝と、中国医学とイスラム医学の交錯の実相を明らかにするものとして、歴史学研究をはじめ多くの分野の研究者の間で存在が注目されてきた。しかし、1990年代以前においてその研究はほぼ皆無であり、90年代に出始めた研究もほとんどは、医学・薬学分野の研究者による、残存巻の記述内容を自らの医学・薬学分野の専門的知識や臨床データに基づき検討したものであった。その理由は、『回回』の翻訳・編集のスタイルにある。本文には、アラビア語音訳語と意識語が混在するため、中世アラビア語および漢文双方の読解力、さらに引用元のイスラム医学・薬学における専門用語の知識を持って初めて解読が可能となる。2000年に発表された宋の研究は、『回回』の記述内容を10世紀のイブン・スィナーの『医学典範』と比較し、漢語音訳されたアラビア語単語を同定し、その注釈つけた語彙研究であった。これが、『回回』とその引用元のイスラム医学書原典と引用踏襲の系統性を検討した最初で唯一のものである。そして『医学典範』には記載のない医学情報が多々確認できることをふまえ、今後の『回回』の史料価値の解明には、より多くの引用元(アラビア語・ペルシャ語のイスラム医学書)を見出すことと、それら原典の一文一文の漢語翻訳に関する徹底的な比較検証が不可避であると方向づけた。

以上をふまえて、本研究では、『回回』残存巻の全記述について、引用元・引用箇所究明、さらには記載情報の系譜の徹底的な検証を目指した。『回回』編纂の背景には、西から到来した新しい医学(=イスラム医学)を、中国において有用な実践的知識として希求した人々の存在がある。本研究は、彼らを通じた医学知の伝播を通して、ユーラシア世界の多元的な交流の様相を捉える史学的研究であるといえる。

## 2. 研究の目的

本研究は、イスラム医学の漢語翻訳書『回回薬方』を解読し、その内容を、アラビア語ペルシャ語によって書かれた中世イスラム医学書類の内容と比較検証し、情報の系統性を解明する実証的研究である。そして本研究の目的は、記述内容の比較検証を通じた、モンゴル時代のイスラム医学の東伝と、中国医学との交錯の実相の解明である。最終的には、この書の漢語テキスト部分と、引用元の中世イスラム医学書のテキストを並置し、英文翻訳・漢語音訳語とアラビア語対応表・文献解題をつけた研究書の刊行を目指す。

## 3. 研究の方法

『回回』は全36巻構成の書であるが、現存するのは4巻(第12巻、第30巻、第34巻、下巻目次巻)である。そこで本研究では、下巻目次巻を除く現存3巻について、記述内容ごとに引用元

(中世イスラム医学書)の同定を目指す。引用元の医学書の同定は、『回回』編纂者やその周囲における、アクセス可能かつ最高の権威として信頼すべき典拠とされたイスラム医学書の判断につながり、ひいてはイスラム医学がどのような人物・集団により東アジアにもたらされ定着したのか、ということの解明につながる。その方策として以下の3つの方法をとった。

(1)文献解説：9世紀以降に編纂されたイスラム医学書・薬学書・薬局方などの調剤レシピを有するアラビア語文献を比較検討し、最も引用元に近いといえる医学書数種の同定にとりかかる。なお、先行研究である宋のアラビア語の漢語音写語彙研究が本研究の土台となっている。

(2)比較検証：次に中世イスラム医学書の調剤処方と比較検証を行う。すでに申請者が『回回』との情報の系統性を確認している医学書3書、9世紀のサーブール・ブン・サフルの薬局方、10世紀のマジュースィーとイブン・スィーナの医学百科から着手する。イスラム医学用語・薬材・調剤薬名・医学者名とその漢字音写・意識された単語リストを作成し、漢語訳の傾向を掌握する。

(3)医学書写本調査・収集：中世イスラム医学書の大部分は、未校訂の写本状態のまま各地に保存されている。イスラム世界研究所やフランス国立図書館にて、中世イスラム医学書写本調査・収集を行った。また中国医学書との関連を調べるために、中国医学書類の調査・収集を開始した。

#### 4. 研究成果

以下、図表は全て申請者の作成である。

(1)『回回』に登場する古代ギリシャ・イスラム医学者の名前の解説：『回回』残存4巻内の12名の医学者名の音訳名を抽出し、彼らの名前の解説に成功した(表1)。彼らはいずれも、古代ギリ

表1. 『回回』残存巻において確認された古代ギリシャ・イスラム医学者

	『回回薬方』中の記載	古代ギリシャ・イスラム医学者名	生没年など
イスラム医学において重要な書を執筆し、その後の医学者たちに大きな影響を与えた学者である。加えて「一等医書内説」	八吉刺太醫	ヒポクラテス	(fl. c. 450sB.C.)
	阿刺思他黎西	アリストテレス	(384B.C. - 322B.C.)
	魯肥西	エフェソスのルーファス	(fl. c. 100)
	札里奴西	ガレノス	(d. c. 216)
	法里福而欲西(造者)	イピロスのフィラグリウス	(fl. c. 200)
	補里西	アイギナのパウロス	(7th C.)
	虎迺尼賓亦西哈黒薬方哈奴尼	フナイン・ブン・イスハーク	(d. c. 873 or 877)
	沙ト而撒哈里〔造者〕	サーブール・ブン・サハル	(d. 869)
	撒哈而八黒忒文書	サハールバフト	(fl. c. 800)
	阿哈麻的法而魯黒(造者)	アフマド・ブン・ファッルーフ	(fl. c. 1100)
	撒刺必榮(傳者)撒刺必榮方内説	セラピオン	(fl. c. 870s)
	阿不阿里撒納	イブン・スィーナ	(d. 1037)
ト阿里			
雅黒牙賓鎖(造過者)	イブン・マーサワイヒ	(d. 857)	
可眉里文書	カーミル(マジュースィーの著書)	(d. 983)	

として、他の医学者の書からの引用記述が散見する。すなわち『回回』は、多数の医学書から記述内容を編纂者が選択抽出し独自の章立てに従い配列列挙した医学百科であることがわかった。なお漢訳名には12世紀初頭のヘラートで活躍したとされる医学者イブン・ファッルーフの名があり、『回回』の編纂期は12世紀以降であることを確実とした。

(2)第30巻引用元の発見：第30巻は調剤レシピを所収する巻である。この巻の引用元は、12世紀の医師ジョルジャーニーによるペルシャ語医学書『ホラズムシャーの宝庫』である

ことを発見した。当該巻所収の約 200 余の調剤レシピのほぼ半数の 104 レシピは、この書のレシピの一語一句の逐語訳であることを確認した。中央アジアのホラズム朝王朝支配下で編纂されたペルシャ語による初のイスラム医学百科全書である『ホラズムシャーの宝庫』との引用踏襲関係は、申請者の知る限りにおいて、従来の研究では指摘されておらず、イスラム医学の東伝と定着に新たな視点を照射するものとして画期的である。この発見は、中国でのイスラム医学の普及には、ペルシャ語そしてペルシャ語を母語とする人々が介在した可能性を示している。現在、逐語訳部分とペルシャ語叙述部分の比較検証を継続中である。

(3)第 34 巻中の項目「針灸門」における焼灼治療の記述とその引用元の発見：第 34 巻は外科書であり、その項目のひとつ「針灸門」の内容は、鍼灸治療ではなく焼灼治療であること、

そしてその引用元は 10 世紀の医学者マジューシーの医学百科全書『医学完全』であることを発見した(表 2)。

表2 『回回薬方』第34巻鍼灸門とマジューシー『医学完全』の比較(順序一致・肩胛骨なし)

章	マジューシー『医学完全』	『回回薬方』	記載の有無
68	焼灼症状の分類	説灸の功効得濟處并凡等證候必用灸治者	一致
69	古ramadと象皮病judhamの者の頭	説眼疼日久氣窄、并癩三等證候、	一致
70	こめかみにおける動脈	説灸了鬢髮際、凡人多有頭疼、并鬢脚疼極甚者、恐有水下來	一致
71	目の臉の縁への	説灸眼皮不令生附餘毛	一致
72	Gharb(目の縁の)	説灸眼角上納速而nasar、證候、又名阿而卜證候<即眼角上小腫似痔瘡者>	一致
73	腋窩		なし
74	胸膜炎shawsaにより生じた傷	説灸因少薩證候<即肺及胸膈内筋腫病>生的瘡、凡此證醫人呼爲咄士里占必(不明)<即胸膈肋肢疼痛生的腫>	一致
75	肝臓	説灸肝經	一致
76	脾臓	説灸痞證	一致
77	胃	説灸胃經	一致
78	水腫	説灸蟲證人	一致
79	へその周りの腫れもの		なし
80	腫れものと大腿部の腫れもの		なし
81	坐骨神経‘irq al-nisa’	説灸肩胛骨 説兩髀骨轉接處脫出、宜灸者凡髀疼、或又渾納撒證候、<即筋鬆及筋長了病證>日久者	一致

療は、紀元前の古代ギリシャ時代からまたイスラム初期・中世においても平生実施される外科治療の一つであった。

(4)第 34 巻通の項目「腹部損傷」の引用元の発見：今回、項目「腹部損傷」部分は、『医学典範』の腹部縫合術法の記述部分の逐語訳であることを発見した。一文一文の比較検証により、音訳語の前後に漢文による補備説明が付置されていたことを明らかにした。また逐語訳部分を検証することで、腹部損傷に関する薬剤・薬品・器具名さらに医学用語のアラビア語・漢語対応表の作成を行った(表 3)。

表3 『回回』と『医学典範』の対訳後一覧(部分)

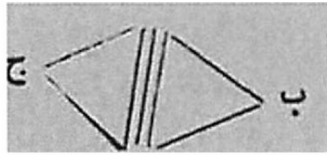
項目番号	アラビア語(ローマ字表記)	アラビア語の意味	『回回薬方』の訳	音訳/意訳
題目	فصل faṣl	分けること・章	説	意訳
題目	تدبير tadbīr	うまく配置すること	治法	意訳
題目	جراحات jarāḥat	傷(複数)	傷損	意訳
1	مراق البطن murāq al-baṭn	臍側腹膜	馬刺忽里八忒尼 皮内腸外一層連筋肉	音訳・意訳並記
1	انخراق inkharaqa	引き裂かれる	裂開	意訳
3	اسفنجة isfanja	海綿	亦西焚只	音訳

(5)漢語文と引用元との一字一句の比較検証の意味と展開:引用元との一文一文の比較検証から、薬劑・薬品・器具名さらに医学用語のアラビア語およびペルシャ語・漢語対応表の作成を開始している。

上記の過程において、文中の音訳語から、『回回』が編纂された地域や社会状況の一面を照射する手がかりを見いだした。一例として、食品サモサ(アラビア語名 sanbūsa : 野菜餡や肉餡を小麦粉薄皮で三角形にくるみ揚げたもの)がある。「三ト撒」と音訳されている。このサモサは三角形の布、パッドの大きさや形状を示す例えとして『回回』では用いられている(図1)一方、引用元の『医学典範』には形状例サモサの記述はない。サモサは中世イスラム世界では市場で販売された

図1 『回回』と『医学典範』の一文一句の比較検証

『回回』		『医学典範』	
訳文	原文	訳文	原文
るし用へに一に傷くも(る縫	控緊処将辺者三又	しあも角で三たいよでも	つるう形、角めり三必し
っ。い三貼辺、が。の食合	之轉・三後・角控	か。ひ布こ布に傷傷角要出	り見とのの片、口口あと血
後かて角りを二直そで、品それ	・接放角控放布繁	とてつ一様の傷をのてする	装いはつに間口真集布る
にり傷布置傷つ線し、の三	着両布繁傷片	着るjは置にを直めは。なら	す形i bく挟二にに四とら
包とののく。(の状て傷サは	如辺片・処・法	る状m ā。んつす良角こ縫	。にで、三のる形る合
帯集周)。(を三に包のサあ	所令両如両如・		
をめ困一図挟角な帯兩サ)て	面傷片傷三		
ま接の辺のむあるを辺にの布	状処緊損ト		
く。さ部よよてよ。卷にの	・兩貼是撒		
せり分う)の置様	而辺着直樣		
ををに)の	後攤傷紋		



日常の食品であった。この食品は、漢語圏の『回回』の編者ないし読者らにとってもまた身近な食品であったことをうかがい知ることができる。

(6)以上の成果はすべてアラビア語・ペルシャ語原典と漢語文との一字一句の比較対照という、本研究によってはじめて着手された方法により明らかにできたことである。史学研究において典型的かつ地道な作業だが、史料の多面的な特質を照射するには極めて有効な検証法であるといえよう。イスラム医学は、古代メソポタミア・エジプト医学、その後の古代ギリシャの医学を集成継承し、体系化した医学である。いわばユーラシア大陸の西の医学の流れと、東の中国を中心とする東アジアの医学の流れとが交錯した結節点に『回回』はあり、そこでは原典の一語一句の逐語漢語訳という作業が展開されていた。そして『回回』の存在は、中国におけるイスラム医学者集団の存在と、中国内で入手可能な薬材や器具を用いての彼らのイスラム医学治療の実践の様相をも浮上させるものとわかった。アラビア語・ペルシャ語と漢語の対訳表の作成にも着手し、一つのモノグラフとして研究成果を編むための方向性と枠組みを打ち立てることができた。最後に今後の課題として2点を挙げる。ひとつは第12巻の中風・麻痺の論考集の引用元の発見である。次に『回回』の引用元として12世紀以降のペルシャ語医学書に着目し、より精度を上げたペルシャ語医学書類の調査と収集、資料の読み込みを行う。

<引用文献>

宋峴『回回薬方考釋』上・下巻，中華書局、2000

Ibn Sīnā, al-Qānūn fī al-Ṭibb 3vols., Būlāq, 1877

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 尾崎貴久子	4. 巻 88
2. 論文標題 漢語イスラム医学書『回回薬方』と中世イスラム医学書の関わりについて－第三十四巻折衝門の腹部損傷の記述から－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 史学	6. 最初と最後の頁 73-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 尾崎貴久子	4. 巻 41
2. 論文標題 中世イスラム世界のレモン利用と伝播に関する一考察 - なぜ12世紀に『レモンの書』は編纂されたのか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 地中海学研究	6. 最初と最後の頁 5 - 37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 尾崎貴久子	4. 巻 87 - 3
2. 論文標題 中世イスラム世界の女性の医療	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 三田史学	6. 最初と最後の頁 61 - 88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 尾崎貴久子
2. 発表標題 モンゴル時代の漢語イスラム医学書『回回薬方』と中世イスラム医学書との関連についての一考察 - 第30巻雑證門を中心に -
3. 学会等名 日本医学史学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 尾崎貴久子
2. 発表標題 中世地中海世界における乳製品利用に関する史的研究 古代ギリシャ期から中世期の地中海世界の医学書から
3. 学会等名 2019ジャパンミルクコンGRESS
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 尾崎貴久子
2. 発表標題 イスラーム・地中海世界の医薬の東進を考える モンゴル時代の漢語イスラーム医学書『回回薬方』を中心に
3. 学会等名 2018年度立教大学史学会大会公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 尾崎貴久子
2. 発表標題 中世期の地中海世界における乳製品の利用に関する史的研究
3. 学会等名 平成29年度乳の学術連合学術研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 尾崎貴久子
2. 発表標題 モンゴル時代の漢語イスラーム医学書『回回薬方』の外科治療記述について 第34巻金瘡門折傷門を中心に
3. 学会等名 日本オリエント学会第60回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 尾崎貴久子
2. 発表標題 レモンから見る中世地中海世界の食生活の特質－12世紀アイユーブ朝サラディンの宮廷医イブン・ジュマイウ『レモンの効能についての論考』を中心に
3. 学会等名 日本地中海学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 尾崎貴久子
2. 発表標題 サラディンの侍医がみたアレキサンドリアの自然と暮らし－イブン・ジュマイウ(1198年歿)の養生指南書を中心に
3. 学会等名 三田史学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	真柳 誠  (MAYANAGI makoto)		
研究協力者	前嶋 浩  (MAESHIMA hiroshi)		
研究協力者	清水 直美  (SHIMIZU naomi)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件



8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------